

## 立教大学コミュニティ福祉研究所学術研究推進資金

## 企画研究プロジェクトⅡ(教員・学生参加型) 2015年度研究成果報告書

プロジェクト 学生代表者	学科・学年	氏名
	コミュニティ政策学科・3年	渡邊真奈
指導教員	所属・職名	氏名
	コミュニティ福祉学部・助教	熊上崇
研究課題	コミュニティ心理学から考える復興支援 ～福島県双葉町の方々との交流を通して～	
プロジェクト 分担者	ゼミ委員：阿部勇磨、武石康伸、森海優、渡邊真奈 合宿委員：川口太一、鈴木亜梨沙、中村尚人、生井貴也 校外学習委員：浅田理沙、安蒜政則、市ノ川博洋、及川昂大	

## プロジェクトの内容及び成果の概要

## 1. プロジェクトの内容

埼玉県加須市周辺に避難している双葉町の町民の皆さんとの交流を、双葉町社会福祉協議会加須事務所にて2015年5月、6月、7月、11月、12月に実施した。

そこで、双葉町の住民の方との交流（レク等）や震災・原発事故後の避難状況の聞き取り、さらに社協の職員さんへのインタビューを行った。

夏季休業期間中においては合宿（2泊3日）で福島県いわき市を訪問し、いわき市に避難している双葉町町民の方との交流・調査を行い各自レポートにまとめ共有した。

## 2. 成果の概要

授業では「フタバから遠く離れて（Ⅱ）船橋淳 著」の輪読を行い、原発事故により双葉町民がどのように避難生活を送ったのかを文献で学習した。

そして月に1度の双葉町社協（加須事務所）の訪問は、毎回大変有意義な時間となった。月に1度しか訪問できなかった私たちにも双葉町民の皆さんはいつも温かく迎えてくださった。午前と午後それぞれレク（室内バレーや合唱、体操など）を行い、学生は町民の皆さんのサポートをさせていただいた。皆さん70～90歳と高齢であるにもかかわらず、とても生き生きとレクに取り組まれている様子がとても印象的であった。お昼休憩の時間には町民の方と学生が少人数に分かれてお話させて頂いた。趣味や日課にしている事のお話から双葉町の歴史や震災前の町の様子などさまざまなお話をすることができた。初めの頃は、普段あまり接する機会のない世代の異なる皆さんと接することに少しとまどいがあった学生も、回を重ねるごとに積極的にコミュニケーションをとれるようになった。

また、ただ訪問するだけでなく学生主体で事前にレクを考えていくこともあった。双葉町に関するクイズを出題したり学生の演奏に乗せて昔懐かしい曲を全員で一緒に合唱したりと主体的に活動する機会もいただき、充実した楽しい時間を過ごすことができた。最後の訪問の際は、大きい画用紙にゼミ生みんなで作った折り紙と1年間の活動写真、そして手書きのメッセージを加えたものをプレゼントさせていただいた。社協の職員さんも双葉町民の皆さんも喜んで下さった。

このプロジェクトで1年間活動して強く感じたのは東日本大震災から5年経った今でも復興はまだ途中であるという事だ。関東近郊に住んでいるとつい震災は過去の出来事と済ませてしまいがちである。しかし、私たちが通っている新座キャンパスがある埼玉県内（加須市など）にも福島県から原発被害を受けて避難生活をされている方がいると知り、自分たちとは無関係な遠くで起きた出来事では済まされないということに気付かされた。またニュースや新聞の情報だけでなく、実際に自分の足で目で心で感じる・知ることの大切さもあらためて実感した。